

保育園のバザーで知った日本人の「もったいない」精神

陳 錦清

季節の変わり目で夏物を片付け、秋物を出すために、普段めったに開かないタンスの奥に手を伸ばすと、遠い記憶にあるような一包みの紐かけ荷が出てきた。

中には娘時代から、大切にしていた赤い色のカーディガンであった。それには糸で編まれた蝶々が飾られ、数十年の経年により色あせた祖母の手編みであり、祖母と母の結婚式の嫁入り衣装でもあった。そのカーディガンはのちに母から姉へ、そしてサイズなどを少しリフォームして私へ伝わった。それを目にする、来日する前に、洋服を片付けた際に、とても手放せず日本まで持ってきたことが思い浮かぶ。いまはタンスの奥に眠っているだけで、ほとんど着るチャンスはないが、それを娘にプレゼントしたら、娘はどんな気持ちになるだろう。

そう思いながら、もう少し手をタンスの底に伸ばして、去年保育園バザーで買った娘の長袖を何枚か見つけ出した。ちょうど朝晩さわやかな秋風で涼しさを感じられたこの季節にピッタリなものだと思い、さっそくまとめて出して、明日にでも娘に着せたい気分であった。窓の外は銀杏の木が夕日に照らされて、柔らかい木漏れ日がまるで金や銀の粉がベランダに落ちているように、周りが急にその色に染められているかのようにまぶしく、幻想的であった。

物価の高い日本に来て、学業と子育てを両立させることが難しいのはいうまでもない。普段アルバイトする時間がないため、家計を最大限に切り詰めなければならない。子供が見る見るうちに大きくなるのは喜ばしいが、つい最近買ったばかりのお洋服がすぐ短くなって着られなくなるのはとても悩ましい。ピッタリしたサイズの子供服がなくなる度に新しいのを買い替える。やがて、購入され続けた子供服の膨大な量と、それを収納するスペースとのギャップが極限近くにまで達してしまった。まさに子供服の災難に直面するような気がする。

そんなことで悩まされていた去年のある日に、偶然保育園で行われたバザーに参加した。初めての参加なので、どんな行事だかまったくわからなかった。日本人の友人は「バザーというのは自分の家庭にとっては不用品だけれど、まだ値打ちのあるものを持ち寄って販売することをいうの。娘さんにいいものが手に入るかもしれないよ。一緒に行こう。」と誘ってくれた。不安と好奇心を抱えながら、実際にバザーに行ってみた。子供用の毛布から靴、カバン、おもちゃ、洋服までいろいろなものがずらりときれいに並べてあった。品物は新品あり、使用感が感じられるものもある。どちらも清潔で、きちんと保管され、ここにきれいに並べられている。洋服代に悩まされたため、このバザーをいい機会に、娘の身長にピッタリしたものを選びたくなった。

けれど、洋服にはほぼすべて名前が書いてあり、それを娘に着せたら笑われるのではなにかと一抹の不安も頭を掠めていた。洋服の名前をじっと見つめ、心配している私の気持

ちを察知しているかのように、バザーのボランティアは「平気よ。これを白い布でカバーして、もう一度書き直せばいいんじゃない。」と微笑みながら、言ってくれた。それを聞いて、私は周りを見渡すと、確かにほかの保護者たちはまったくそれを気にしていないようで、気に入りのものをどんどん買いこんでいる。なにしろ安い。ダウンがたったの100円。ユニクロあたりで買えば、ゼロのケタが一つ、二つ跳ね上がる。十着も買い漁っていった保護者も珍しくはなかった。並べられた品物はあっという間に残り僅かになった。「古着の子供服を娘に着せるなんて、貧乏くさい。」といわれるのを心配していたが、このバザーで見た、喜んで買う側と売る側の笑顔は最初にあった心のわだかまりや心配から私を解放してくれた。私も娘に似合う中綿のコート二枚と厚めの長ズボン三枚を買うことにした。娘はそれらを見て、大変喜んでくれた。「来年、家にたまっている数回しか着なかった洋服をバザーに出そうね」と娘に言ったら、娘は「うん、お洋服も喜ぶよ。だって、喜んで着てくれる人がいるもん。」と答えてくれた。

このようなバザーの良さを中国にいる姉にも伝えようとしたが、逆効果になってしまった。旧正月になり、中国に帰省した時のことだった。バザーで買った服を娘に着せて、旧正月の恒例行事とされる親戚廻りをした。姉が娘の着ている少し大き目で、使用感のある服を見るやいなや、「なんでこんなみっともない服を子供に着せるのよ。新しい年に、新しくておしゃれな服を着せないと、恥ずかしいよ。」と怒鳴っているような口調で私に向かって言った。「別にいいんじゃない。保育園のバザーで買ったもので、サイズも大体合うし、何よりも安いから。子供ってすぐ伸びるし。なにも旧正月のためにわざわざ新しいのを買わなくていいんじゃない。」と私は言い返した。すると、姉は「昔、家は貧乏だったから、お下がりばかりもらったでしょう。今は時代が変わった。あなたは子供に自分みたいなつらい思いをまたさせる気？」と理解できない顔で言った。

姉の話を知っているうちに、子供時代の旧正月の光景が目には浮かんできた。一家団欒の旧正月の晩餐会。騒然とした空気が溢れる街には、つぎはぎだらけの服を着ている子供の姿や、お尻の割れた特有のベビー服から尻をほうり出している赤ちゃんの姿をよく見かけた。お正月といったら逆にそれが記憶に残っている。思えば、旧正月だからといって、衣類を新調する余裕などはなく、破れた古着やお下がりや庶民の日常生活に欠かせない存在であった。

あれからわずか三十年、なぜ親をはじめとする人たちはこんなに「新年服」に拘るようになったのか。不思議に思った。昔貧困の苦しみを味わった姉のことだから、少しでも子供次世代の暮らしを豊かにしたいという気持ちは理解できなくはないが、旧正月の一日から十五日まで、一日一着の新年服を着替えさせるのは、やはり面子とファストファッションに毒されているのではないか。去年、姉の息子が着ていた洋服がばらばらに切られ、雑巾として掃除に使われるシーンを目にすると、「まだまだリユースする価値があるのに」と言わざるをえなかった。

さらに、意外なことに、姉は息子の洋服代を惜しまずにお金を使ったが、肝心の息子は

十五日間、毎日ずっと着替えることに感覚が麻痺して、その顔には面倒くさそうな色が浮かび、喜びが見えない。その無表情は、姉と私が祖母の手編みのカーディガンを手に入れた時の興奮や、バザーで買ってあげた古着をもらった瞬間の娘の喜びとは対照的であった。この対照に気づいたとき、もう一度バザーに誘ってくれた友人の次の言葉を思い出した。

「新しいものより、自分が本当に欲しいものがうれしいのだと思う。子供服は古くなったとって、まだまだその価値があるから、それを活かさなかったら、もったいないでしょう。」「もったいない」はとても心に響いた言葉であった。日本では、若者の間でも「メルカリ」や「オフオク」を通して、日常的にものを捨てずに再利用することで、「もったいない」精神が受け継がれている。

少子化が進んでいる日本では、かつてのように兄弟でものを共用することはなくなったが、古くからシェアが根付いており、「お下がり」は依然として絶大な人気を博している。日本人はなぜ「もったいない」という精神を持っているのだろうか。もの本来の価値を活かせない事態に直面すると、「ああ、もったいない、もうちょっとうまく利用できるのに」という感情、創意工夫が自然と沸き起こる。日本人はこの感覚をいつ頃から植え付けられるのであろうか。

「もったいない」という言葉のルーツは、あるものが持つ価値が十分に活用されずに無駄になるのを惜しむだけでなく、万物には神が宿っており、それを無駄にすることを恐れるという宗教心理によるものであろう。もったいない精神というと、何か少し貧しい時代を思い起こさせるようなニュアンスも伴っている。しかし、そのルーツを紐解くと、ものの価値を残さず発揮させるという、日本独自の価値観につながる深い考え方があるように思える。

大量消費・大量廃棄の果てに、温暖化・プラスチックごみなどをどうするかで悩む世界の人々にも「もったいない」精神は、きっと有効な示唆を与えてくれるだろう。

バザーの盛況ぶりはとても印象的だったが、それは普段日本の保育園でよく見かけられる風景を連想させる。娘は日本の保育園に入ってから、なぜかラップやトイレットペーパーの芯を集めることに熱中するようになった、そのわけを聞いたら、「これはおもちゃに使えるの。」と真剣な顔で答えてくれた。確かに、捨てればゴミになる廃材も工夫次第で有用材に変身する。「もったいない」精神は日本人の古来よりものを大切にするという気持ちとして受け継がれ、生きている。これからもこの精神が生き続けてほしいと願っている。